

造形 Journal

造形ジャーナル 図工、美術指導の可能性を広げる情報誌

Vol.56-2

通巻 412号

2 0 1 1

CONTENTS

アート・エッセイ

空中の茶室／藤森照信

特集／

未来へつなげる造形教育

第2回 美術文化をつくる

これから美術教育はどう変わるのか／大坪圭輔 — 2

新教科書紹介～絵画ページ～／小池研二 — 6

新教科書紹介～彫刻ページ～／水野谷憲郎 — 8

新教科書紹介～デザイン・工芸ページ～／小澤功 — 10

新教科書紹介～鑑賞・特設ページ～／神野真吾 — 12

新教科書 Q & A — 14

今、美術の教科書に求められるもの — 16

図工室・美術室

37通りのドラマとの出会い／橋本英子 — 18

小さなあれっ？を見つけよう／瀧澤春生 — 18

「まちの美術博物館」とつながる／吉原万寸美 — 19

先生、思いどおりに描けました！／浦郷寿 — 19

地域のアート

高松うみあかりプロジェクト／藤原慎治 — 20

造形ピックアップ

「美術ゼミナール」紹介／浅野豪 — 21

造形プラザ

「無言館」所蔵作品による戦没画学生「祈りの絵」展 — 21

東日本大震災で被災された方々へ
心よりお見舞い申し上げます。

開隆堂

ART ESSAY

アート★エッセイ

空中の茶室



藤森 照信
(建築家)

仲間が集まり、お茶を飲んで楽しむための茶室をどうして空中に作るのか。普通の茶室のように地上でもいいだろうに。

私もはじめはそのように考えていた。でも、2003年に最初の茶室を建てた時、立地と湿度の配慮から地上より1.5mほど上げ、下からハシゴを使ってもぐり、上がるようにして作ってみると、思いのほか良い。

ちょっと上がっただけで見慣れた光景が意外に新鮮に映る。加えてもう一つ、ハシゴを登る時、登ることに意識を集中せざるをえないから、周囲への視線はいったん閉ざされ、いってしまえば狭い闇のなかを通り抜けて茶室に入ることになり、その結果、狭い茶室が広く見えるばかりか、茶室の窓からの光景もより新鮮に映る。茶室の祖、千利休が工夫した「にじり口」の効果がもっと上がるのである。

なお、利休は窓は明かり取りにとどめ、外の光景を忘れて茶事に集中するように決めたが、私の場合、伝統の

茶道とは別に、仲間で集まったり、時には一人で茶を楽しむ人のために茶室を作るので、広い窓を開け、利休の茶室の閉塞感を減ずるようにしている。

2004年、自分用の茶室を故郷の信州に空高く作り、作ってみるとあまりに高いので、「高過庵^{たかすぎあん}」と名づけた。それを見た吉井長三^{きちいながみ}さんから、甲州の清春白樺美術館^{きよはるしらば}の庭にも欲しいといわれて2005年に建てたのが、「茶室^{てつ} 徹」。吉井さんが敬愛する谷川徹三^{やがわてつ}にちなみ、阿川弘之の命名になる。

写真から見て分かるように、元校庭の桜を見るための茶室である。ジョルジュ・ルオーのお孫さんが訪れた時、風に吹かれて一ひらの花びらが茶碗に入り、一同、感激した。

一本脚だから、ゲゲゲの鬼太郎の家のようなだという人もいるし、谷川俊太郎は「親指のよう」といい、そういう一篇の詩をよんでくれた。

(ふじもり てるのぶ)



「茶室 徹」2005年
清春白樺美術館 (山梨県)

平成24年度用中学校美術教科書1年の表紙に掲載しています。

特集

未来へつなげる造形教育

第 2 回

美術文化をつくる

豊かな造形活動から文化創造へ

小学校の新学習指導要領完全実施の年となり、次年度からは中学校も完全実施となる。新学習指導要領の目玉はなんといっても「共通事項」の新設であろう。小学校の図画工作科、中学校の美術科において連続性をもたせ、育成する資質や能力と学習内容との関連を明確に示したのである。PISA 調査に右往左往した目先の能力開発ではなく、世代を通じて伝承されていく文化としての教育内容となっている。

図工・美術の時間は創造性を育む造形体験をしながら、自らを表現していく稀有な教科である。子どもたちは美術文化の一端を、造形遊びをしたり、さまざまな色を使って絵の具でかいたり、粘土で形をつくったりして、表現を通して学んでいく。自分自身の個人的な感覚やイメージ、造形活動の楽しさが美術文化理解、文化創造へとつながっていくのである。そのためには、感性教育である図工・美術をもう一度足元から見直したい。

技術教育が中心となった、画一化されたマニュアル主義に陥っていないだろうか。児童や生徒の評価が技術習得に偏重していないだろうか。写実性に偏り、現代美術や子どもの原初性から目を背けてはいないだろうか。子どもたちの本来養うべき自由な発想よりも教師のイメージを強要していないだろうか。

図工・美術の時間が子どもの豊かな感性、創造性やコミュニケーション能力を育むための授業を構築し、何よりも創造することの楽しさを実感できるような時間となれば、子どもたちは美術文化に関心をもって、生涯にわたり主体的にかかわっていくようになるだろう。それは同時に、子どもたちが次代に向けての文化創造に参画していくことに他ならないのである。

これから美術教育はどう変わるのか

武蔵野美術大学 大坪 圭輔

1. エネルギーとしての「突破力」

東日本大震災により、被災された皆様に深甚なるお見舞いと、犠牲者及びそのご遺族に対しお悔やみを申し上げます。

この未曾有の災害を眼前にし、また遠い復興の道のりを考えるとき、今回の震災は社会の構造そのものに重大な変化を迫る規模であると言えます。また、未来や将来に希望を見出せない若い人たちを中心とする閉塞感の存在が近年指摘されてきましたが、今回の震災によって、さらにこの閉塞感が広がる危惧もあります。この大きな課題は、単なる防災システムの見直しや安全対策、経済対策などの問題ではなく、これから我々はいかに生き、どのような社会を目指すべきかという根源的な問いです。そして、これは今を生きる我々全員に等しく突きつけられており、それに立ち向かうべき国民の教育とはいかなるものかを考えるべきときにあります。

一方、社会風潮としての「閉塞感」に対して、デザイナーやクリエイターを中心に、「突破力」という言葉をよく聞くようになりました。一般的に、このような何か新しい言葉や思考に接すると、これまでの我々の教育的視点では、何を突破するのか、突破してどこに向かうのか、どのように育てるのか、成果の評価はどうするのかなど、まず目的論や方法論でこれを理解しようとしています。しかし、この「突破力」については、目的や方法論は状況に応じてあったとしても、総体としては、人間が個々に内在するエネルギーを意味しています。さまざまなエネルギーが世の中にはあり、それらのほとんどは人間にとって必要なものですが、大量のエネルギー消費が自然環境を破壊し、人間の生存そのものを危うくしていることも事実です。しかし、この人間に内在するエネルギーはどんなに使っても環境を破壊しません。消費されてなくなることもありません。むしろ、人間どうしの結びつきによって増幅し、広がり拡大していくのです。すなわち、「突破力」の言葉で表される人間のエ



▲「美術1」表紙



▲「美術2・3」表紙

開隆堂の平成24年度用
中学校美術教科書は、
新学習指導要領の趣旨を生かして、
第2学年および第3学年を一冊にし、
資料を充実させました。
このことで、表現と鑑賞の学習の
深まりがさらに期待できます。

エネルギーこそが、閉塞感のある社会を連携の中で押し広げていくことができる可能性を有しているのです。それはまた、今までの「生きる力」よりももっと積極性と強さを持ち、今回の震災が突きつけている大きな課題をまさしく突破していく力にもなりうると考えます。

2. 美術科の中核として

この「突破力」が象徴する人間に内在するエネルギーは、同時に、美術科がその教科性において最も重要視してきたものの一つであるということもできます。すなわち、内在するエネルギーの燃焼による自発性や主体性です。これは新学習指導要領改訂においても、「美術科改訂の趣旨」における「改善の基本方針」や「改善の具体的事項」の中で明らかです。

「改善の基本方針」の一つには、「図画工作科、美術科、芸術科（美術、工芸）については、その課題を踏まえ、創造することの楽しさを感じるとともに、思考・判断し、表現するなどの造形的な創造活動の基礎的な能力を育てること、生活の中の造形や美術の働き、美術文化に関心をもって、生涯にわたり主体的にかかわっていく態度をはぐくむことなどを重視する」があります。

また、「改善の具体的事項」には、「(ウ)鑑賞においては、よさや美しさを鑑賞する喜びを味わうようにするとともに、感じ取ったことや考えたことなどを自分の価値意識をもって批評し合うなどして、自分なりの意味や価値をつくりだしていくことができるように指導の充実を図る。また、鑑賞に充てる授業時数を十分確保するようにする」があります。

この基本方針における「主体的にかかわっていく態度」は、美術科の中では目新しい言葉ではありませんし、教科の目標としても馴染みのある内容です。また、具体的事項にある「自分なりの意味や価値をつくりだしていくこと」は、言葉としては馴染み深いものではないかもしれませんが、その考え方はこれまでも美術科の中に一貫して流れてきました。今、改めて美術科が教科の中核としてきたこの「主体性」や「自分なりの意味や価値」を吟味してみると、これらは「突破力」の言葉で象徴される人間的エネルギーにつながる学習であると言えます。

今回の新学習指導要領では、〔共通事項〕によって教科

の基盤が明確に示されるとともに、このような主体的な学びを核とするこれまでの教科性が一層鮮明になりました。そして、新しい教科書もまた、主体的学びを通して、自らの考えや思いをもつことができる授業を保障するものでなければなりません。中学3年間の美術科の学びによって、生徒たちが「突破力」と呼ぶことのできるエネルギーを身につけ、やがて時代が求める「連携による協同社会」の形成者となることを願っています。

3. 連携から始めよう

ここで言う「連携による協同社会」とは、「突破力」や「自発性」、「主体性」が向かう先にあるものです。各個人の中のエネルギーが自分自身のためだけに使われたのでは、不完全燃焼です。自発的、主体的に連携を切り開き、かかわりを深め合おうとすると、「突破力」というエネルギーは増幅し大きな力を発揮することになります。そのように連携が個人レベルから始まり、社会構造の基本となったものが「連携による協同社会」です。そこには自らの意思で社会に参画しようとする積極性や意欲の連鎖があります。そして、柔軟な強さがあります。今、連携から始まる新たな学習が求められているのです。

今回の新しい美術の教科書には、さまざまな立場の人が登場します。これまでは中学生と作家やデザイナーがほとんどでしたが、学芸員、美術大学生、地域住民、医師、調理師など多彩です。美術の授業を要として、人のつながりを広げ、そこからさらに学びを深めることを目的としているのです。このように、人と人の連携やかかわりは新しいエネルギーを生み出しますが、これは人に限ったことではありません。

『美術1』では、小学校の図画工作科と中学校での美術科の学びのかかわりを整理し、美術科の学びについて考えることを提示しています。「美術の学習で大切にしたい4つのかかわり」と題し、美術の学習を通して向かい合う「自分」の感性が「学校・生活」、「友達・交流」、「自然・社会」と美術や造形を介してかかわることの大切さを示しました。これまでの学習とこれからの学習を関連づけることこそ、すべての学習における基本的な態度であり、新学習指導要領が求める知識の量だけではない、思考・判断の道筋をつけていく本質的な学びのあり方です。

表現中心とし、『美術2・3下』を鑑賞中心とすることによって、表現と鑑賞のそれぞれの学習の深まりと、第2学年及び第3学年における学習の構造を分かりやすくすることを目指しました。これについては、各方面から一定の理解と評価を頂きましたが、今回はさらに合本の形式をとることによって、新学習指導要領改訂の趣旨を生かし、より深まりと広がりのある美術の学習を保障できるように構成しました。

新学習指導要領の「美術科改訂の要点」中、「(1) 目標の改善 ア」と「(2) 内容の改善 イ鑑賞領域の改善」から読み取れるのは、中学校において美術文化に対する学習は美術科が担当することがより明確になったこと、それを受けて美術文化の系統的な学習に対応する題材や教材を教科書として提示する必要があることです。また、表現と鑑賞それぞれの関係性をより緊密にすることも求められます。これを第1学年における基礎的、全領域的な学習から始まり、第2学年、第3学年でのより深みと広がりのある学習へと進めることに対応するようにしています。

また、学習の内容と方法を効率よく提示し、生徒にとっても扱いやすいものとして改編するべく、合本の形式を採

用することにしました。今までにない厚みと重みをもった『美術2・3』の教科書とともに、新たな美術の学びが展開されることを期待しています。

5. 生きることと美術

『美術2・3』の最後の題材は「生きることと美術」です。川俣正の「椅子の回廊」と、西尾美也の「家族の制服」、日比野克彦の「明後日朝顔プロジェクト21」、ボイスの「7000本の樫の木」を取り上げています。

震災における直接的な支援という意味では、美術は無力かもしれません。しかし、被災者だけでなく、我々全員がこれからの生き方を考えようとするとき、美術は大切な役割を担うことになります。

この教科書を使って学ぶ中学生が成人するときが来ても、今回の震災からの復興はまだ道半ばでしょう。誰もが模索しているとき、連携を重要なキーワードとして編集した教科書とともに「突破力」なるエネルギーを身につけ、震災が突きつける大きな課題に取り組む人材が育ってくれることを願っています。

(おおつぼ けいすけ)



▲「美術2・3」p.92・93

美術を通して、自分たちの身近な生活から、平和や生きること、表現することの意味を考えます。



▲「美術2・3」p.84・85

新教科書紹介～絵画ページ～

横浜国立大学 小池 研二

1. 絵画ページの編集方針

絵を描く行為は、人類にとっては有史以前から行われている基本的な行為です。私たちも物心ついたときからさまざまな形で絵を描いて成長していきます。

この教科書では、基本的な題材である絵画について、生徒が興味をもって楽しく接することができるように編集されています。小学校の図画工作科の学習と連携を保ちながら絵画表現の奥深さや多様性、独創性といったことを順序立てて学習していくようになっています。

『美術1』8～11ページでは、「心ひかれる風景」という題材名で風景画について取り上げています。ここでは作家作品と、多くの生徒作品を例に挙げながら、自分が心ひかれた風景を作品化することを試みます。美しさを発見するための視点の持ち方や、作品を制作する上での重要な点などを具体的に見ていきながら、4ページ構成の十分な紙面を使用しています。

また、作家自身の言葉も載せ、作家がもつ造形感覚といったものも生徒に投げかけます。生徒作品も鉛筆や水彩によ

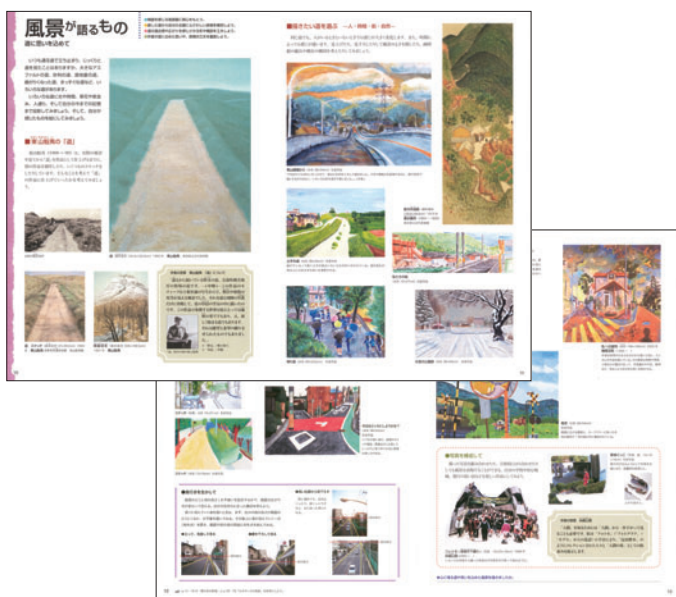
るスケッチ風なもの、作者が好きな場所を紹介するワークシート風のものなど多岐にわたり、制作の全容を紹介しています。つまり、単なる技法書とは違った制作の喜びや、制作について主体的に考えることを大切にしています。

『美術2・3』10～13ページでは、「風景が語るもの」という題材でやはり風景画を取り上げています。一見同じような内容に見えますが、子どもの成長に合わせてより一層踏み込んだ内容になっています。奥行きを表し方や構図の工夫といった学習内容を盛り込みながら、風景画の意味をより深く考えさせます。学習する内容は、子どもの発達に応じて発展していきますが、根底に流れる基本的な考え方は一貫しています。

また、この新しい教科書は技法や知識を、ポイントを押さえてきちんと説明しています。しかし、いわゆる知識や技術だけを伝えることだけが目的ではありません。創造活動をすることにより思考し、判断し、表現する、これから求められる学力をつけるための具体的な手立てを示すことを編集方針としているのです。



▲「美術1」p.8～11



▲「美術2・3」p.10～13

2. 絵画ページの特長・特色

この教科書の特長の一つとして、図版の大きなことが挙げられます。『美術 2・3』の5～7ページのエステスの作品は、見開き3ページを使って大きく掲載し、圧倒的な迫力で生徒に迫ってきます（本誌 p.16 参照）。

新学習指導要領では鑑賞の指導の重視が挙げられています。本来なら実物の美術作品を鑑賞することが望ましいのですが、学校現場で実現することはなかなか難しい問題です。大きな図版であれば作品の隅々まで鑑賞することができます。また、掛図と違い、生徒各自がゆっくりと教科書を使って鑑賞し意見を述べ合い、表現活動につなげていくなど、高密度な授業を展開することが可能です。ほかにも2～4ページの尾形光琳「紅白梅図屏風」、20・21ページのゴーギャンの作品をはじめとして多くの作品が大きく見やすく掲載されています。

また、言語活動が十分に行われるように会話のヒントとなる質問例を記しました。例えば、『美術1』の「主役を探そう」というページでは、東洋西洋それぞれの特長ある作品について、「主役はどこにいますか」「色や描き方を比べてみましょう」といった質問例を示すことにより、生徒どうしが意見を言いながら2作品を比較して、より深い鑑賞活動や表現活動が行われるように工夫しています。

二つ目の特長として、幅広い材料や技法を取り上げてい

ます。版表現やオートマチックな技法などは写真や図を取り入れながら視覚的に解説し、生徒が表現活動をする上でよい参考となります。ここで取り上げる技法もただ単に表面的に紹介するだけではなく、生徒各自が発想や構想したことを表現するためにはどのような技法が有効なのかを選択するための案内として記しています。絵画は筆で描く、といった固定概念から生徒は解放され、より自由な表現方法について考えることになるでしょう。

三つ目の特長として、我が国の伝統的な文化を取り上げています。日本の伝統的な絵画作品を紹介することはこれまでごく普通にありましたが、新教科書は岩絵の具などの材料や伝統的な技法を使っての作品制作を積極的に紹介し、造形的な伝統とは何か、美術文化の継承の大切さとは何かをより具体的に生徒に考えさせるきっかけとなっています。日本の文化を理解することは世界の文化を知る機会となります。21世紀は、世界中のさまざまな文化を広く理解し、互いに尊重し合うことが重要です。義務教育である中学校の美術科で日本の伝統文化を学ぶ意義は非常に大きいと言えます。

このようにこの教科書で扱う絵画のページには、多くのメッセージが込められています。そして、すべての学習内容において、美術が私たちの生活に直結していることを訴えているのです。

(こいけ けんじ)



▲「美術2・3」p.20・21



▲「美術1」p.32・33

▲「美術2・3」p.30・31

新教科書紹介～彫刻ページ～

淑徳短期大学 水野谷 憲郎

1. 彫刻ページの編集方針

彫刻題材は、学習指導要領において「つくる」活動の中のデザイン・工芸と並ぶ重要な柱です。デザイン・工芸が使い手の好みや使い勝手を大切にすることで他者への思いやりやおもてなしを形にしていくのに対し、彫刻はその立体性、量感、空間性を契機にした心象表現です。立体だからこそよりよく表せるものがあります。

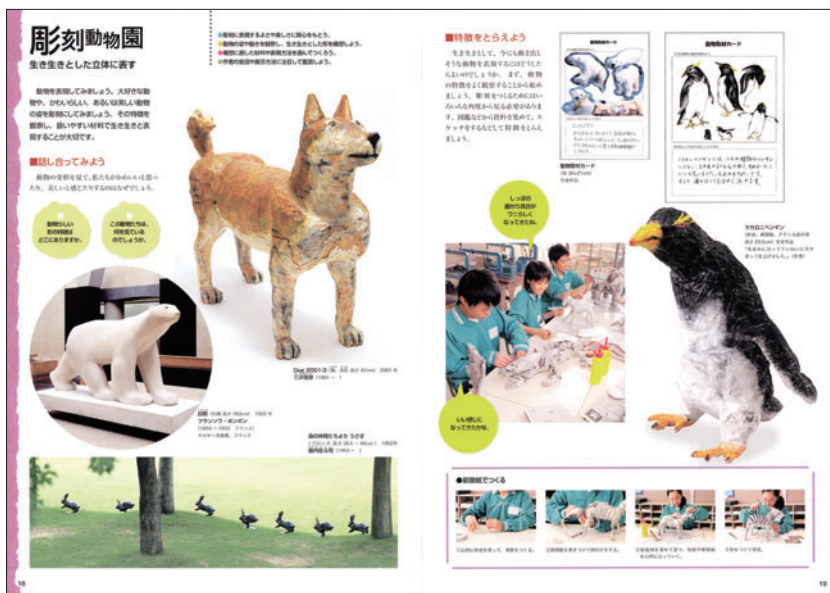
また、小学校の図画工作科との関連も大切です。中学生になり、子どもの大好きな触覚的な立体造形への興味や関心を一層広げることや、立体やそれが作り出す空間の美を目指した造形活動をする、またその技法の獲得や工夫へと主体的に活動が展開することを大切にしています。彫刻という立体的造形表現は材質感（触覚性）や立体性、空間性、色彩や光、さらには設置と環境などさまざまな要素もっています。この多視点と実空間をもつ独自性は彫刻の魅力そのものです。

そこで、教科書ではさまざまな素材を取り入れ、その特

質を味わい、想像してねらいを見出すことや、自然や身のまわりなど外界にある対象を深く見つめて自分なりの主題を見出すことを重視しています。さらに、立体としての材質、彫刻の表情や変化に思いを広げたり、環境と立体造形や大空間そのものを造形とする考え方へと展開したりして、彫刻表現の多様なあり方へと理解を広げていきます。

その一方で、彫刻は人体をモチーフとして追究してきた経緯があり、今日の彫刻表現の多様性は人体表現という具象性への批判や発展からの展開とも見えます。そこで、具象性と多様な広がりを見せる抽象性を踏まえ、人体をモチーフとした具象彫刻作品として、西洋近・現代彫刻や我が国の仏像を取り上げ、彫刻表現の概要を示しました。

彫刻ページでは掲載した技法や作家の言葉などの関連情報によって、立体造形の特質や独自の技法を知り、その抵抗感や多様性からの発想、構想を楽しみ、自分らしく創造することを期待しているのです。また、過去の造形や現代の多様な表現を鑑賞することによって、彫刻的な価値観を生徒自らが育むことができるように、表現と鑑賞を一体的に扱っています。



▲「美術1」p.18~19



▲「美術1」p.20



▲「美術1」p.21

2. 彫刻ページの特長・特色

(1) 図画工作科との連携と彫刻の基礎・基本を学ぶ

『美術1』の彫刻ページとして初めて出合う題材は「彫刻動物園」なので、小学校図画工作科との関連を図っています。芯材のまわりに新聞紙を巻きつけていく積み重ねから動物という塊をつくり出す技法は、図画工作科で親しんだ紙やのりの感触です。動物づくりを楽しみながら、量的な実感や塊の存在感、抵抗感という彫刻の基本的魅力に出合います。参考作品には、彫刻として自分らしく動物を表している三沢厚彦の作品を取り上げています。

また、発想と構想も重要です。「彫刻動物園」の「■特長をとらえよう」というねらいでは観察のしかたを提案しています。よく観察し、知ることは愛着と想像の扉を開きます。「■材料の特長を生かす」学習は、素材から見立て、想像し、創造していく手立てです。葉を重ねたり、流木から見立てたりした作例など素材の特質による発想の違いを掲載しています。表現活動は往々にしてつくったらおしまいになりやすいのですが、「■動物園をつくる」では、仕上がった作品を生き生きと並べて鑑賞し合うことを提案します。

(2) 彫刻表現の広がり可能性へ

『美術2・3』は、彫刻表現の多様な可能性を体験していきます。大別すると彫刻造形には具象的なものと抽象的

なものがありますが、「空間を感じて」という題材では、具象性としての「■手の構造や空間から」始まり、抽象性を主とした多様な彫刻造形の可能性を開きます。「■手の構造や空間から」では、手が空間を囲み、建造物のような造形をもつロダンの「カテドラル」を提示し、手をモチーフとしながらその形態がもつ空間性や構築性を生かした新鮮な立体空間表現へと誘います。「■人の動きが作り出す空間」では、人体による豊かな空間やボロフスキーのような意表をつく作品などを提案しています。大切なことは、ただの人体再現ではなく、人体と空間とがかかわるときに生まれる空間の雄弁さなのです。次に「■抽象形としての空間」へと進展します。言葉やイメージを手掛かりに自由な発想を広げ、「■大空間にチャレンジ」するのです。立体は空間と一体です。塊があれば空間は仕切られ、囲まれ、新たな表情を見せます。それを大空間に押し広げればイサム・ノグチの「モエレ沼公園」となるのです。

抽象への展開に対し、具象は主に人体がモチーフとなります。「人体の造形」ではボテロなどを参照し、人の形で思いを語ります。「仏像の美」で提示している仏像は、その宗教的役割からさまざまな願いのもとに祈りの造形として人体が使われている特異な彫刻であり、仏像独自の創意を味わい、祈りの姿を表現するページとなっています。

(みずのや のりお)



▲「美術2・3」p.36・37より
左：ロダン「カテドラル」
右：ボロフスキー「シンギングマン」



▲「美術2・3」p.72・73

▲「美術2・3」p.40・41

新教科書紹介～デザイン・工芸ページ～

東京大学教育学部附属中等教育学校 小澤 功

1. デザイン・工芸ページの編集方針

新学習指導要領の目標を達成し、また、小学校との連続性と生徒の発達段階を考慮したデザイン・工芸の表現、及び鑑賞の幅広い活動が示されています。

デザイン・工芸の表現活動を通して、楽しみながら、創造活動の基礎的な能力を身につけ、美的感覚を高め、美意識を育めるように工夫されています。また、実生活でデザイン・工芸の果たす役割や、デザイン・工芸がつくる文化の重要性に気づき、生徒が主体的に思考・判断・表現できるように編集されています。伝える、使うなどの目的や機能を考え、デザインや工芸などに表現するための発想・構想する力と、発想・構想をもとに表現する技能を育てる学習内容は次の四つです。

- (1) 身近な環境やさまざまなものを対象とし、形や色彩の造形感覚とデザインの能力を養い、造形的に美しく構成したり装飾したりして表現する活動（構成と装飾）。
- (2) 伝えたいことを形や色彩、材料、多様な表現方法を生かし、美しく、分かりやすく、効果的に表現する活動（伝達）。
- (3) 使うなどの機能と美しさを追求する「用と美の調和」を考えて表現する活動（用途や機能）。
- (4) 心豊かな生活や社会を築くために思いやりの心や、自然や風土との共生を考えて表現する活動（思いやりの心・やさしさの観点）。

新学習指導要領に提示されたデザイン・工芸の新たな課題を真摯に受けとめ、確実に授業実践ができることを編集方針としています。



▲「美術1」p.22～25



▲「美術1」p.26・27



▲「美術2・3」p.58・59

さまざまな地域の日本の伝統工芸を取り上げています。

2. デザイン・工芸ページの特長・特色

(1) 「構成や装飾」の発想・構想と表現する技能

楽しく構成したり、飾ったりするのに必要な色彩感覚や造形感覚を高めるために、自然や身近な生活環境の中から、豊かな色彩、美しいデザインがあることに気づかせる活動を取り入れ、そこから新しい表現を発想することができるように編集されています。また、美しさや周囲との調和、目的や条件を勘案しながら試行錯誤して多様な作品を提示したり、自分の表現意図に合う色・形・材料・技法などを選択、工夫したりして表現ができるように示されています。

(2) 「伝達」の発想・構想と表現する技能

デザインによる伝達の能力を一層高めるためには、伝える内容が生徒自身にとって価値があるものなのか、または社会に伝える必要があるものなのかを検討したり、伝える目的や条件に合わせて、相手の気持ちを考えたりする必要があります。そのための生徒どうし話し合いの活動ができるように示されています。また、より分かりやすく、美しいものを目指すために、美意識を働かせ、文字や図柄、配色や構成、立体表現や映像メディアを活用した表現な

ど、多様な表現方法に注目し、その効果について理解を深め、自信をもって表現活動できるように示されています。

(3) 「用途や機能」の発想・構想と表現する技能

「使う」などの機能と、美しさとの調和を考える造形能力を高めるために、使用者の気持ちや、つくろうとするものの機能、使う場面、遊び心や夢など、生徒自身が楽しみながら発想・構想し、生活に役立つ作品の制作活動ができるようにしています。また、現代の工芸作品や日本の伝統工芸を鑑賞し、先人の技や知恵などを学習することで、美的感覚が高められます。素材の美しさに気づき、自分の意図に合う材料を選択、吟味し、用具や表現技法の特性を理解しながら、見通しをもって表現できるように示しています。

(4) 「思いやりの心・やさしさの観点」から

未来への願いや社会生活を改善していく創造力を育てるために、思いやりの心や心安らぐ生活空間、自然や風土との共生を視野に入れ、新しい生活文化を創造する規格や提案ができるように示しています。また、さまざまな優れたデザイン、工芸、建築の作品が時代を経て、変容していく過程を知り、自己の価値観にもとづいた美的判断力を高められるように示しています。 (こざわ いさお)



▲「美術2・3」
p.42・43



▲「美術2・3」p.52・53



▲「美術2・3」p.61

新教科書紹介～鑑賞・特設ページ～

千葉大学 神野 真吾

1. 鑑賞・特設ページの編集方針

私たちにとって美術科が大切なのは、感性を用いて対象に向き合う基本的な能力を身につける唯一の教科であるからです。美術は「ヴィジュアル・アート (Visual Art)」と呼ばれることもあるように、その多くを「視覚」に依存しています。そして、私たち人間が外界から得る情報の多くが視覚から得られているというのもよく知られていることです。

その「観る」という行為を通して得られる感覚をどのように自身の経験にまとめていくのか、これはとても大切なことで、美術科にはそうした重要な教育的使命が課せられています。

美術科を通して、「観る」ことについて学ぶことには二つの意味があると思います。一つは、自分の眼で美術作品をじっくり観て、その文化的背景を知識として学ぶことで、感性的な把握と、理性的な認識とを自分の中で総合するということです。その過程で文化の体系としての美術が理解され、それへの敬意が生じます。

もう一つは、さまざまな表現・対象をどのように自分は評価するのかという「批評的な眼差し」を手に入れることだと言えます。これは、授業で制作したお互いの作品を批評し合うということから始まり、美術家たちによる作品を自分なりに批評することへ、そしてさらには、まわりの美術作品にとどまらないさまざまな事象に、自分なりの意味づけを与え、自らが主体的に生きていくことへとつながっていきます。

教科書の編集作業の中では、こうした視点を意識しています。私たちが最低限知っておくべき美術文化を厳選し、その背景をわかりやすく説明し、生徒たちが自分なりの理解ができるような問いを投げかけ、彼らに覚えておいてほしい作品の図版を配し、紙面は構成されています。

また、現代の表現を紹介する場合には、美術家たちが美術を通じて投げかけているメッセージを、私たちが実際に生きている社会の中で位置づけられるように、あるいは自分自身に結びつけて考えられるように、いわば「等身大」の表現を重視し紹介しています。



▲「美術2・3」p.32・33

3ページにわたり作品を大きく掲載し、じっくり鑑賞することができます。



▲「美術2・3」p.65～67

2. 鑑賞・特設ページの特長・特色

日常の中で、自然から学ぶという側面も教育はもっていますが、美術に関しては残念ながら、それのみでは十分に基礎的な知識や能力を身につけるのが難しいのも事実です。また、環境によっては、本物の美術作品に接することが難しい場合もあり、美術のすばらしさや可能性を伝える貴重なチャンスをこの教科書が握っています。そうした点から、「一生涯持ち続けてもらえるようなものにするにはできないか」という考えを出発点に、鑑賞および特設ページは構成されています。

第一に重視したのは、図版をより大きく掲載し、鑑賞に耐えうるものとするというものです。そのため見開き2ページの左ページには、できるだけ大きく図版を載せ、より大きくした方がその作品の魅力をより多く伝えられると判断した場合には、2ページにわたり、場合によっては3ページにわたり作品を掲載しています。もちろん、作品の選定に際しては、さまざまな角度から検討しています。

重要な美術文化を教えると言っても、世界にはさまざまな美術と呼びうる文化があるわけですから、そこには限界があります。私たち日本人が押さえておくべき美術文化を絞り、紹介しています。その一つは、学習指導要領でも重要視されている我が国の伝統文化です。日本人が育んだ

独自の美術文化を「絵巻」「琳派」「仏教彫刻」に絞り、造形上の約束事や現在の私たちにつながる要素を示し、**自国の文化を自分のものとして感じられるよう配慮しています。**そして「美術」を文化として体系的に発展させ、私たちにも強い影響を与えている西洋美術についても、「ルネサンス」「印象派」「抽象表現」を取り上げ、美術が私たちのものの見方や考え方に影響を与えていることを示しつつ、頻繁に耳にするこうした美術の内容を押さえることで、美術との距離を縮めてもらえるよう配慮しています。また、西洋と日本の美術の関係を示す動向の一つとして「ジャポニスム」を紹介し、**世界の美術文化が互いに影響を受け合い発展していることも示しています。**

そして、現代の表現を紹介する際、最も重視しているのは、美術が決して実社会や実生活とかけ離れた存在ではないという視点です。私たちが日常生活の中でもつ感覚・感情が、美術家の手によって、「表現」のレベルに高まっていくことを作品鑑賞を通して感じてもらうとともに、日常生活の中で自分たちが考えたり、行動したりするための素材が無数に存在するのだということも感じてもらえるような作品選定を行い、解説を付しています。

全体を通した特長として言えるのは、今回の鑑賞のページは、**自分と美術の関係を身近なものにできるような視点で貫かれている**という点です。 (じんの しんご)



▲「美術2・3」p.68



▲「美術2・3」p.78



▲「美術2・3」p.76



▲「美術2・3」p.70



▲「美術2・3」p.80



▲「美術2・3」p.82

新教科書 Q&A

Q1：新学習指導要領になり、これからその内容を十分に指導していけるか不安です。

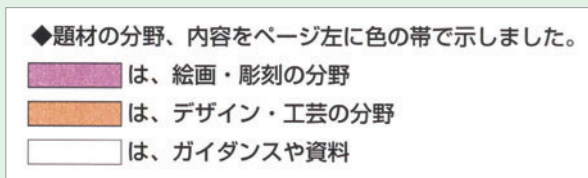


▲「美術1」p.5



▲「美術2・3」p.8

Q2：具体的に、どのような題材を選択し、どのように指導したらよいのでしょうか。



Q3：生徒が興味や関心をもって取り組めるような授業を目指していますが、それぞれの題材を実践する上で、どのようなことを心がけたらよいのでしょうか。



Q4：なぜ、今回の教科書は、1年生用と、2・3年生用の2分冊となっているのですか。

A1：心配することはありません。そのために教科書を活用しましょう。開隆堂の新教科書では、『美術1』の最初のガイダンスに美術の学習で大切にしたいことを提示し、3年間を見通したスタートを切ることができます。また、『美術2・3』では、美術を学び、どのように社会に活用していくのかの提案を巻頭や巻末で提案しています。

A2：新教科書では、題材の分野を明確に表し、それぞれの題材ごと、観点別に目指す目標や導入例を示しています。さらに、多くの作家作品や生徒作品を提示し、制作のヒントや新しい価値観を見つけ出すきっかけを示してあります。また各題材の最終ページには、学習の振り返りが設けてあり、系統的に学習することができます。指導するという視点だけではなく、生徒と一緒に学び、共感しながら学習することのできる教科書です。

A3：授業では、まず何を学ぶのかという「目標」をはっきりさせることが大切です。また、生徒の実態に合った多様な題材や材料、表現方法を見つけることで、興味や関心を高めることができます。開隆堂の教科書では、各題材の学習のねらいと振り返りをわかりやすく示し、題材の分野や内容を色分けした帯で題材ごとに明確に示しました。また、一つの題材に多くの切り口を設け、多様な表現に対応しています。

A4：学習指導要領では、大きく第1学年と、第2学年及び第3学年として、各学年の目標が示されている趣旨を生かしました。第2、第3学年では、2学年間を見通し、学年間の関連をより図りやすくするとともに、表現と鑑賞の一体化を深くするために、資料としてのページを多く設けました。知識的な内容とともに、発想・構想の場面や表現方法に着目し、表現活動に生かすことのできるように詳しく解説してあります。常に2学年分の内容を携帯、参照できるような教科書になっています。

Q5：題材を実践しようとするとき、道具・材料などの扱ひ方のコツのようなものはありますか。



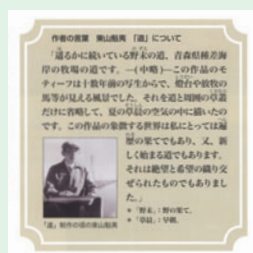
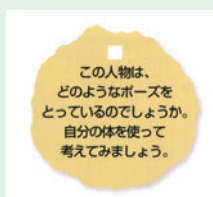
▲「美術1」
p.44・45

▲「美術1」p.46・47

Q6：生徒たちに題材をより深く考えさせ、発展させていきたいと思ってきましたが、なかなか思うようにいきません。どのようにしたらうまく指導ができるのでしょうか。



Q7：教師経験の浅い私でも、教科書に載っている多くの図版や資料を効果的に活用できるのでしょ



A5：教師ももちろんですが、題材によっては、生徒たちが自ら材料を集めたり資料を探したりすることから、学習活動が始まっていると言えます。材料や用具の知識はその上で欠かせません。

開隆堂の教科書では、発想・構想の段階や表現方法などの段階で、参考になるような各題材の材料や大きさをはじめ、基礎的な制作手順や技法、安全、知識なども生徒の活動の場面とともに図版入りで、多く示してあります。わかりにくい用語や名称については、脚注を設けました。

さらに、材料の扱ひ方や用具の使い方については、『美術1』の巻末に設定された「道具箱」や「Let's Try！」などでも、わかりやすく解説しています。

A6：開隆堂の教科書では、一つの大きなテーマで、4ページにわたり題材を取り扱うなどの工夫をしました。題材の発想から構想の道筋、基礎的な技法や知識から発展まで、制作過程の写真とともに、段階的に示す工夫がしてあります。または、同じテーマの題材をあらゆる視点でとらえ、発展的な学習が自然な形でできるように工夫されています。教科書をじっくりと読み進むことで、より深く主題に迫ることのできる内容になっています。

A7：図版や資料は、作品の定まった評価を学ぶことではなく、いろいろな視点で思いをめぐらせ、自分の中に新しい価値を見出し、制作に生かしていくためにあります。開隆堂の教科書では、その目的と内容に応じて、大きな画面や図版を示すなどの工夫をしています。また、鑑賞の視点のヒントとなる問いかけやコメントが、作品とともに多くちりばめられています。さらに、関連した作家の言葉や制作方法などの資料も豊富で、表現と鑑賞の一体化が、自然な形でできるようになっています。

今、美術の教科書に求められるもの

■新たな価値を創造するための地図

伊藤 文彦 (静岡大学教育学部教授)

美術の教科書は、新たな価値を創造するための地図でなくてはならないだろう。「教科書どおり＝オーソドックス・型どおり」といった比喩的表現はすでに過去のものと思わすべきである。伝統的に承認されているものや習慣的な形式に縛られることなく、今日の学校現場で求められているものは、それらに対する正しい理解にもとづいた、新たな価値を創造できるかにあり、それが「創造的に生きていくために必要な力」となる。

開隆堂の教科書は、図工・美術の世界に対して重層的・多元的な見方・考え方を自然に誘発されるようにデザインされるとともに、「自分」が自らの心・美術・学校・社会に対してどのようにリンクすることが「新たな自分の価値づけ」につながるかを見通すための地図でなくてはならないとの主張を感じる。この教科書を読んだとき、「子供の教育は、過去の価値の伝達ではなく、未来の新しい価値の創造にある。」といったJ・デュイの言葉が強く思い出される。

■豊かな表現活動の実現のために

佐々 有生 (島根大学教育学部教授)

「指導の根拠がわかるものに」
「表現が固定的にならず、幅広く応用のきくように」
「掲載作品を多く」
「素材と向き合う活動の様子・過程が見える教科書を」
美術の教科書に求める教育現場の声です。

表現活動は、子どもたち一人一人の自然な感情や思考の発露による直接的で操作的な活動を基軸に展開されます。そのうえで、造形的な文化価値内容の感受及び習得などの受容的な学びを包含しつつ、それらが子ども自らの主体的、能動的な自己表現に結びつくことによって真の造形表現につながります。

教育現場の声を受けとめ、子どもの自然な感情・思考と造形的価値内容との止揚・統合を図る教科書づくりをめざしています。豊かな表現活動の実現ため、活用を期待します。

■新しい教科書の魅力

蝦名 敦子 (弘前大学教育学部教授)

中学1年生に初めて授業をした時のこと。みんなで教科書を最初から、最後までじっくり見た。そして、各自で最も好きな作品を掲載作品の中から3点と、やってみたい題材を1点選んでもらった。その時、好きな作品として一番多かったのは、意外なことに美術作品ではなく、水彩画の生徒作品であった。一方、やってみたい題材については、きれいなポスターカラーで着色した平面デザインの構成画であった。好きな作品とやりたい教材は、違うものとして生徒に捉えられていたことが、印象に残ったことを思い出す。

美術の教科書は、美しい図版と内容のわかりやすさがポイントではないか。授業を進める時に題材を理解するためのものだけではなく、そのページを見るだけで、感動したり、意欲が引き立てられたりするもの。中学校で使用した教科書がそういえば開隆堂だった。美しい図版と、わかりやすさで、新しい教科書もまた、みごとに応えてくれている。

■地域の伝統的美術文化の理解に向けて

菅生 均 (熊本大学教育学部教授)

新学習指導要領「美術科」の目標において、「美術文化についての理解を深め」という一文が加えられた。このことは我が国の郷土の伝統や文化を受けとめ、そのよさを継承発展することの重要性を認識し、さらにこの認識こそが国際化、異文化理解の根底になることを示唆している。

私の住む九州は古来より工芸の先進地であり、全国的に見ても多種多様な工芸が展開されてきた土地柄である。にもかかわらず工芸に対する子どもたちの認識度は極めて低く、例えば有田町に住みながら世界的文化遺産とも言える有田の陶磁器類についてほとんど知らないといった状況である。子どもたちにはその地域に継承されてきた伝統的美術文化を義務教育段階で確実に学習させ、その意味・価値を理解させる必要がある。この観点からすれば、開隆堂の美術教科書の内容には大いに期待するものがある。



▲「美術2・3」p.3・4



▲「美術2・3」p.5～7



▲「美術2・3」p.63・64

■美術の教科書が示すもの

長瀬 達也 (秋田大学教育文化学部准教授)

昭和 29 年から中学校美術科 (昭和 33 年までは中学校図画工作科) の教科書発行という重責を一貫して担ってきた、開隆堂の初めての教科書が前田青邨他編『図工』です。1年生用では空に向かっていくロケットが噴出する白煙であふれている写真とともに、「私たちのまわりにあるものは、みないろいろの形や色をもったものばかりである」と宣言し、2年生用では「美しさを感じとる能力がつくと、今まで気がつかなかった別の美しさをあらたに発見することができる」と語っています。

このような中学校美術科に対する揺るぎない信念は、今回の平成 24 年度用教科書でもあふれています。同書は美術科で学んだことが、美術科だけにとどまるのではなく、人間形成や、生活に生きる創造性の育成につながり、さらに広がることを意識しています。吟味された写真や、磨かれた文章で、より一層強く伝えてくれます。21 世紀という時代を生きる生徒や教員の皆様にも、この素晴らしさが届くことを、切に希望します。

■自然研究の道標として

平川 晋吾 (宇都宮大学名誉教授)

私が中学生の時、学校の帰り道に、私の歩く前方へ金緑色、金赤色にいろどられた甲虫の「ハンミョウ (道教え)」が前へ前へと飛んでいて、その美しさにドキドキしたものです。

絵をかくとき、自然との対話は不可欠の条件だと思えます。ひとは自然の中で大気や植物などと同じ一片の自然物です。絵をかくためには、自然の観察と描写、つまり、ものを見てその様子を写すことが基本になります。具体的には、それぞれの役目をもった三つの要素 (1) 線=尺度、(2) 明暗=重さ・尺度、(3) 色彩=性質・重さ・尺度と三つのもつ性質が相互に関連しながら、形を実現する手段としてはたらくことになりま。

開隆堂の美術教科書は、以上の内容に加えて各分野に参考図版を配置して充実をはかっています。授業にあたっては、各単元の作例を雛型として利用するだけでなく、例えば作例の模写を試みるなどして、この教科書が道標としての役目を果たすことになればと考えています。

■美術の教科書の使い方

吉井 宏 (福岡教育大学名誉教授)

中学校美術の先生方は、教科書を使わずに授業されているとよく言われます。しかし、それは偏った学習内容であったり、教師の個人的な好みや安易な方法によるマンネリ化した実践になっていたりする例もあるようです。開隆堂の新しい教科書には、極めてバランスのとれた、基本的で系統的な教材編成にもとづいた、生徒一人一人が自ら学んでいける工夫が見られます。教師もこの教科書をそのまま活用したり参考にしたったりすることで、安心して授業を進めることが可能です。

私が子どもの頃に使っていた教科書を思い出しても、好きだった絵や、気になる作品を今でも印象深く覚えています。永久保存版の美術書として機能しているのです。美術の教科書で学んだことが、美術の専門家でなくとも、社会のいろいろな分野で働いている人々の心を潤し、その日常生活の中で生かされることを願っています。

■まねる・まなぶ美術教科書

新関 伸也 (滋賀大学教育学部教授)

新しい美術教科書のキーワードは「まねる・まなぶ」教科書である。教師がまねたい、生徒も学びたいと思う美術教科書がベストである。まねたいと思う教科書、つまり教師が使ってみたいと思う教科書とは「(1) 題材の目標や評価が明確で指導方法が読み取れる。(2) 技法が具体的で、かつ造形要素など学ぶ事柄が明示してある。(3) 表現や鑑賞の手助けとなる生徒及び作家の作例が適切である。(4) 見やすい文字の分量と図版のレイアウトである」ことなどが必要である。この教科書では、伝統的な題材だが「心ひかれる風景」や「風景が語るもの」などのページにこれらの特徴がよく現れており、授業で使える構成・紙面となっている。

また、教科書は生徒が自主的に見て、読んで「まなぶ」ことも多い。参照ページやガイダンス、巻末の資料や美術年表などは、授業だけでなく、自らの表現や鑑賞の手引きとなる内容である。まさに「まねる・まなぶ」ことを意図した美術教科書といつよい。

■「美を求める心と人間性」を育むために

村瀬 千樫 (前北海道教育大学教授)

中学生の時期は、自分なりにさまざまな価値を確定していく。そのような中で真の美・芸術・文化との出会いは極めて重要で、自らの人生を左右するともいえる。教科書との出会いは、本物の「美を感じ、知の驚きと意欲が高まる」魅力をもったものでありたい。●造形として表れる力 (発想力・基礎的技能・知識など) と自立した人間として身につける力 (思考力・判断力・創造力など)「培う力」を明確にしたもの。●発達に応じた連続性のある創造活動の中で、「未知の自分」と、次々と出会うプロセスをもったもの。●制作に没頭し、独自の世界、新たな可能性を発揮でき、充実、安定、存在感など、「自信と生きがい」を味わえるもの。●自らの生活や社会などとさまざまなつながりを持ち、イメージを「広げ、深め、掘り下げる」ことのできる内容や方法を示したもの。●日本人としての誇りを持ち、伝統や時代を見つめ、創り出し、究極として「美を求める心と人間性」を育む教科書でありたい。

■答えのない教科書

吉岡 正人 (埼玉大学教育学部教授)

美術の教科書は不思議な教科書だ。正解が書かれていないのだ。生徒たちを一つの解答に導いてゆくこともない。書かれているのは、きっかけといくつかのヒント。そこから生徒たちは自由に想像力を羽ばたかせるのだ。

しかし、正解のない自由さは生徒には楽しいものであっても、教師には難しいものかもしれない。つまり、教師も想像力と創造力を発揮することをこの教科書は求めているのだ。答えのない自由さを教師も楽しみながら授業をしてほしいと思う。そのために教師は学んでほしい。「教える人」であるための資格は、「学ぶ人」であることだと私は思っている。

教科書に載っていることは著者たちの思いの氷山の一角だ。その一角から氷山を思っしてほしい。紙面には載せられなかった多くの事柄を見つけてほしい。それは教師にとっても楽しい時間になるだろう。

37通りのドラマとの出会い

北海道帯広市立広陽小学校 橋本 英子

真っ白な画用紙が、時間の経過とともにさまざまな線や色を加えられ、ひとつの作品として壁面に飾られます。子どもたちの表現の豊かさを改めて実感する瞬間です。その思いが开花した作品は、何ものにもかえがたい色彩の妙、造形的美をもち、大人を圧巻し続けるのです。作品を鑑賞しながら、「いいね、どれも違う37通りの絵がみんなを見ているよ。」「大げさだよ！



「未来の動物」へメッセージを書いている場面。

でも、ホントに



「自分のうつつをつくらう」

みんな違うね！」そこから、わいわいと色がどうの、形がどうのと会話が弾んでいきます。作品を通し、そこから見えてくる作者（仲間）と、知らず知らずのうちに対話している子どもたち。大人が見ていいと思うところと、子どもの琴線に触れるところの違いに驚かされながら、みんなで作品を鑑賞するのは、実に楽しいひとときです。そし

て、その時間が次の作品への意欲とになっていくのでしょう。黙々と取り組む姿は、それを物語っています。

「図工ってどうしてあるの?」「食事でもバランスが大事だよ。勉強もそうだと思うない? 脳や体のいろんなところを使ったほうが、より大きな人間になれそうだよ。」

3年生の子どもに理解されたのか疑問ですが、たくさんの感覚を磨くきっかけになる図工の取り組みを、これからも大切にしていきたいと思います。

(はしもと ひでこ)



「だんボールの変身・家をつくらう」

図工室

小さなあれっ? を見つけよう

東京都板橋区立新河岸小学校 瀧澤 春生

「小さなあれっ? を見つけよう」これは私が日頃、授業で大切にしているテーマです。

「ダ! スヴィダーニャ!」いったい何の言葉かわかりますか。1月の図工室での「さようなら」の挨拶(ロシア語)です。月替わりで国を変えていますが、その国の人になったつもりで声



を出しています。慣れない言葉に、はにかみながらの挨拶は、表情が生き生きして見えます。

私が図工室で木を切っていると、部屋に入ってきた子どもが一言、「先生、お墓のにおいがするよ。」

初めは何のことかわかりませんが、切っていた木が杉の木であることでピンとききました。

杉の木を切るときの焦げるようなおい→お線香(杉の木がお線香の原料となる)→お墓のにおい。

このような発想の展開がおもしろく、ほかのみんなにも伝えたくまりました。

素材を手にした子どもたちは、自分のイメージに近づけようとつけ加えた

り切ったりして手を加えますが、そんなときは「あれっ?」の連続なのでしょう。その表情に思わず見入ってしまいます。

小さな「あれっ?」を積み重ねることの楽しさを知り、自らの「あれっ?」を発見するよさを感じ、環境を豊かにできる子になってほしいと思っています。(たきざわ はるお)



「まちの美術博物館」とつながる

愛知県豊橋市立二川中学校 吉原 万寸美

前任校（豊城中学校）は、豊橋市中心部に位置している。学校に隣接する城址公園には、豊橋市美術博物館がある。全校生徒を引率し、年に数回この博物館を訪れ、常設展をはじめ、さまざまな企画展を鑑賞した。

昨年、「ひかり・いろ・かたち」をテーマにした愛知県移動美術館が開かれた。事前に図工・美術教師、学芸員が協働し、一般とジュニア向けのリーフレットを作成した。これを使って事前に鑑賞の視点を学校で指導し、全員が移動美術館で授業をした。リーフレットを手に学芸員のギャラリートークを聞き、作品を鑑賞する授業である。クレーク

女の館>の暗い画面からもれる光を感じて「きらきらゆらゆらしてる」、ロダン<歩く人>の動きをまねして「このポーズできないね」、舟越桂<肩で眠る月>を一周して「後ろの顔はだれ」「月はどこ?」「何か想像できる?」というように、生徒は友だちと自由に感想をつぶやきながら作品に向き合っていた。

美術博物館で鑑賞の授業を行うよさは、専門家が美しくディスプレイした本物を鑑賞できることだ。また、美術館の非日常的空間の中で、生徒は作品との対話へ自然に引き込まれていく。鑑賞する生徒の姿やつぶやきから、作品とふれあい、心が動かされる感性の

ゆらぎを感じる。

校区に美術博物館があるため、ほとんどの生徒がここに行ったことがあるだろうと考えていたが、中学校入学前の訪問経験は60%ほどである。鑑賞授業を終えると、「授業では見る時間が足りなかったから休日に来たい」と口にする生徒が現れた。生徒が「まちの美術博物館」に親しみ、将来にわたり美術を愛する心をもってほしいと願い、今後も美術館とのつながりを深めていきたい。（よしはら ますみ）



学芸員のギャラリートークを聞く生徒

美術室

先生、思いどおりに描けました！

佐賀県武雄市立武雄中学校 浦郷 寿

「将来、生活に困ったら、この技を生かしてお金を稼ぎなさい」と言いながら、子どもたちと一緒にバルーンアートをつくっている。

また、自画像を似顔絵風に描かせながら「これがうまくなったら一枚500円で売れるから、食べていけるぞ」と言ってみたり、ネイルアート



を指導しながら「これならプロでも通用して、すぐにでも売れるよ」と生徒に言ってみたりする。

ずいぶんいい加減な“先生”であるが、この不安定な世の中、半ば本気である。

ほかにも、アニメの原理がわかっていない子どもたちに画用紙と画びょうと木片だけでゾートロープをつくらせてみたり、鉛筆を削る機会すら失われた子どもたちに一枚の板から小刀だけでペーパーナイフをつくらせていたりしている。

型にはまらずおもしろく、かつ、お金のかからない題材を探すのが好きだ。

やっぱり美術は楽しいのが一番。でもどこの偉い人が言うように「教育されない個性は野生」だと思っから、基礎・基本は大切にしている。

風景画では絵の具を5色しか使わず、試行錯誤させてすべての色が作り出せることに気づかせる。苦労したからこそ、子どもたちの顔には心からの喜びがあふれる。

「先生、思いどおりに描けました！」
(うらごう ひさし)



地域のアート

高松うみあかりプロジェクト

香川県高松市立古高松中学校 藤原 慎治

1. アートが島にやって来た

「瀬戸内国際芸術祭 2010」は、四国高松と七つの島を会場に、国内外から75組のアーティストを招いて7月から10月まで開催されました。記録的な猛暑にもかかわらず、90万人を超える鑑賞者が訪れました。知的好奇心の高い多くの人々が来県し、芸術祭は新しい人の流れを生み出しました。

2. 美術の教員として楽しみたい

高松市民が参加できる唯一の「高松うみあかりプロジェクト」を知ったのは、3月初めです。高松市の美術教員の研修会で、参加を呼びかける説明会がありました。

多くの先生の反応は低調でした。予算、時間がない。急にはできない。そもそも芸術祭が成功するのかという意見まで出ました。そんな中、手をあげてくれた先生が3名。生徒たちに芸術祭を体験させてみたいという思いを共有して、四つの美術部チームが動き出しました。

3. どうしてつくるのか

作品鑑賞は、美術の授業の中で完結してしまうことがほとんどです。ときに美術館に行って鑑賞することができても、それは遠足など学校行事の一コマで、ワークシートやレポートの提出で終わりです。今、アートの最前線で起きていることと、学校の美術指導は向かっている方向がずれているのではないかと感じ続けてきました。

本来、美術は生徒と現実の社会をつなぐことができるもの。作品制作は人をつなぎ、さらにそこから地域や時間をつなぎ広げる力をもっているはずで

す。本来、美術は生徒と現実の社会をつなぐことができるもの。作品制作は人をつなぎ、さらにそこから地域や時間をつなぎ広げる力をもっているはずで



この芸術祭には生徒を変える力があると直感しました。「あかり」作品が芸術祭のオープニングを飾ることで、自分の芸術祭だと思えること。そうなれば、家族を初め多くの人に紹介したくなります。高松に住む中学生は近くの島にさえ行った経験がほとんどなく、島の名前も分かるのは小豆島としまがやっと。彼らの前で県外の鑑賞者が島のすばらしさを讃えるのを聞いて、初めて自分の住む瀬戸内の価値を見直し、誇りを感じるはずで

4. 3年後の瀬戸内国際芸術祭

香川県は今後もこの芸術祭を継続させることで高松を魅力のある街にすることができると確信し、県政策の最優先事項のひとつに掲げました。過疎化する島々を島の島に変える力は「アート」以外にありません。新しい価値を提示し、その魅力によって人を動かすことで社会構造までも変えてしまえるのです。

今回参加した美術部員は休日返上、連日夜遅くまで「あかり」制作に励み、オープニングイベントや島々の展示を楽しみ、郷土の美しさに目を向けました。3年後、6年後には彼らが溯上する鮭のように成長し、心から郷土を愛する者として、ともに支えてくれる仲間になってくれることを願っています。

(ふじわら しんじ)



「美術ゼミナール」紹介

— 諸橋近代美術館にて —

福島県中学校教育研究会美術部会では、さまざまな行事を実施しています。とくに「美術ゼミナール」は、ずいぶん前から行われているもので、参加する先生方は、1学級分のスケッチや作品を持ち寄り、比較的経験を積んだ先生方の洗礼を受けることになります。最近はとてソフトな雰囲気が進められるようになりましたが、ついこの間までは、自分の実践をとことんけなされてやる気をなくすこともあって、評判を落とした時期もあったように思います。それでも、作品研究のほかに、毎年さまざまな講師を招いての実技研修会や講演会も行っていて、参加した先生方からは好評を得ています。

紹介が逆になってしまいましたが、ここ数年、1日目の午前は裏磐梯にある「諸橋近代美術館」で鑑賞会を行っています。この美術館はサルバドール・ダリの作品を多く展示していて、特にダリの立体作品が充実してい



諸橋近代美術館前での開会式

福島県福島市立松陵中学校 浅野 豪

ます。東北では珍しい、企業が運営している美術館でもあります。

また、学校教育との連携にも力を入れていて、近隣の学校へのサポートも積極的に行っています。

県中教研にも絶大な協力をいただいております。諸橋英二館長には特に感謝しています。昨年、福島市で開催された全造連福島大会では、館長さんに記念講演をお願いし、大会を盛り上げていただきました。



立体の作品研究の様子

た。近くに五色沼もあり、美術館周辺のロケーションは最高です。我が福島の誇れる美術館にぜひお立ち寄りください。

(あさの つよし)

造形プラザ

横浜赤レンガ倉庫100周年 「無言館」所蔵作品による戦没画学生「祈りの絵」展

一度だけでいい、あなたに見せたい絵がある。

太平洋戦争下、生きて選って絵を描きたいと叫びながら遠い戦地に散った若き画学生たち。

戦後六十余年、全国のご遺族が守り通した遺作・遺品300余点を創建百周年を迎えた赤レンガ倉庫で一挙公開します。

- [会 期] 2011年5月26日(木)～6月14日(火) 会期中無休
- [開館時間] 11時～20時
- [会 場] 横浜赤レンガ倉庫1号館 3Fホール
- [料 金] 当日1,000円(小中学生500円)、前売900円(小中学生400円)
なお、本展における収入の一部は、東日本大震災で被災された方々の復興へのご支援とさせていただきます。
- [お問合せ] 戦没画学生慰霊美術館「無言館」事務局 0268-37-1650



興侶武「編みものする婦人」 無言館蔵
(油彩、キャンバス 72×53cm)

よくわかる図画工作科 学習指導要領 ビジュアル解説

授業への生かし方

藤澤英昭／監修
石賀直之 西村德行 三澤一実／共著
B5判／96ページ(カラー)＋資料16ページ付き
定価 2,415 円(本体2,300円)



豊富な作例や活動例でビジュアルにわかりやすく学習指導要領を解説!

Q&A方式で、学習指導要領の考え方を授業に生かすポイントを解説!

図画工作で つく学力はこれだ!

—ひと目でわかる指導と実践のポイント—

藤澤英昭 柴田和豊
佐々木達行 北川智久／共編著
A4判／64ページ(オールカラー)
定価 2,100 円(本体2,000円)



図画工作科で培う学力ってなんだろう? そんな疑問にお答えします。

学力の理論的裏付けとともに、具体的な指導や評価のしかたを授業実践で示しました。



造形ジャーナル

Vol.56-2 (通巻412号)
定価120円(本体114円) 送料120円

平成23年4月28日印刷 平成23年5月10日発行(年3回発行) 編集兼発行人 山岸 忠雄
印刷所 株式会社大熊整美堂 〒112-0002 東京都文京区小石川4-14-32
発行所 開隆堂出版株式会社 〒113-8608 東京都文京区向丘1-13-1
☎(03)5684-6121(営業)、5684-6118(販売)、5684-6117(編集)／振替 00130-8-75296
<http://www.kairyudo.co.jp>



開隆堂出版株式会社

本社 〒113-8608 東京都文京区向丘1-13-1 ☎03(5684)6111

北海道支社 〒060-0061 札幌市中央区南一条西6丁目11番地 札幌北辰ビル8階 ☎011(231)0403
東北支社 〒983-0043 仙台市宮城野区萩野町1-11-1 萩野町Mビル2階 ☎022(782)8511
名古屋支社 〒464-0802 名古屋市千種区星が丘元町14番地4号 星ヶ丘プラザビル6階 ☎052(789)1741
大阪支社 〒550-0013 大阪市西区新町 2-10-16 ☎06(6531)5782
九州支社 〒810-0075 福岡市中央区港2-1-5 F Y Cビル3階 ☎092(733)0174